

翔べ！
世界へ

日本人としての「国際感覚」 と人的ネットワーク

た博士論文と同時期に学術雑誌に発表した論文とで学位もとったりと、諸事に追われながら、私は、自分が日本の文化に違和感すら感じるようになっており、そのような自分の変化への対応（頭の切り換え）が必要であることを認識していた。とはいえ、日本で生まれて育ってきた私が、たった二年ですっかり別人になろうはずもなく、そのような違和感は、感覚としては薄れ、記憶としての認識へと変化していく。ただし、この認識が

現在の私の「国際感覚」にとって重要な役割を演じている。

留学後、ほぼ毎年、学会や研究会、あるいは、研究者の訪問でヨーロッパに出かけている。その研究交流活動の中で、新しい交流を育んできた私の社交性は、このイタリア留学中の経験で培われたことは疑いない。とりわけ、この留学経験が与えてくれた、日本人としての「国際感覚」が何よりも大切に思える。私が専門分野としている数理生物学は、いわゆる学際分野、複合領域の一つであり、概して研究者が分離している生物学系と数理系の双方の研究者との交流が非常に重要である。その交流の理想的な実現のためには、学問分野にとられない人的ネットワークの広がり非常に重要である。そのような人的ネットワークは、研究者との学術上の交流だけでなく、人と人としての交流によって広がっていく。

▲ナポリ大学応用数学教室の事務員の方たちと（左から3人目が筆者）

二年間に過ぎない、しか

も、一〇年も前のイタリア留学なのだが、幸運にも、若い時期の私に与えられたその経験は、今の私にとってのみならず、これからの私にとっても、人生において、学究生活において、実り多き経験を与えてくれたつづける比類なき財産である。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学金が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学金を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、これを支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長 故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一四五名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四〇五名の外国人留学生への奨学金の供与や文化教育面での事業運営を実施してきている。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部

瀬野裕美

せの ひろみ

広島大学大学院理学研究科助教授



国際文化教育交流財団第12回生（1987年度）

84年京都大学理学部卒業。87～89年ナポリ大学応用数学教室留学。89年京都大学大学院理学研究科博士後期課程生物物理学専攻研究指導認定・同日退学。90年理学博士号（京都大学）取得。日本医科大学助手、広島大学理学部講師、奈良女子大学理学部・同大学院人間文化研究科助教授を経て、2000年4月より現職。専門は生物数理、数理生物学。

私は、国際文化教育交流財団の奨学金によって、一九八七年から八九年の二年間、イタリアのナポリ大学応用数学教室に留学した。当時、私は、京都大学大学院の大学院生であり、この留学は、「京都大学理学部ナポリ大学間の応用数学および数理生物学の分野における協定」に基づく学生交流の一環としてでもあった。

イタリア留学

大学院生の私が所属した寺本研究室の専門分野は、数理生物学（Mathematical Biology）であり、私もこの分野の魅力にとりつかれていた。数学者や物理学者と生物学者、医学者の優れた共同研究は、カナダや米国からぞくぞくと発表されていたが、指導教官の一言で、ひよんなことに、イタリアへの留学と相成ったのである。

イタリアは、数理生態学（Mathematical Ecology）の二〇世紀における発展の契機となる研究を行ったことでも有名な数学者 Vito I. Volterraを生んだ国であり、

その意味でも私には興味深い留学先決定だったのではあるが、何よりも、日本に常に多くの情報が流れてくる米国に比べて、私にとって、文化的に未知という魅力（冒険者意識!）を感じさせてくれたことが大きい。そして、この運命的な選択が、結果的には、私の「国際感覚」を育む素晴らしい経験を提供してくれた。

人としての交流

ナポリにたどり着いたのは、八年十月の初めである。この留学時期、私は、生物の移動拡散がその個体群動態に及ぼす影響に関する理論的な数理モデル研究をテーマとして博士論文をまとめつつあり、ナポリ大学でも、この研究を進展させつつ、お世話になった先の研究室の専門分野である確率過程を応用した数理生物学の問題にも取り組んだ。実は、私が留学していた当時、イタリアには、「大学院」というシステムがなく、日本では大学院生であった私は、おそれ多くも、客員研究員扱いだった。

イタリアでは、ひしひしと感じられるほどに、学生と教官の上下関係、教官と事務職員の関係には、日本のそれに比べてかなり明確で、厳格な区別があったのであるが、ナポリでの生活で私が最も恵まれていたのは、やはり、地元の人たちと知り合いになり、その温かさ

に囲まれていたことである。

大学の事務の方たちには、午前一〇時頃の（エスプレッソ）カフェタイムに加えてもらったり、家に招いてもらったり、と身内のように扱ってもらったし、下宿の大家さんにも息子のよう

「国際感覚」の生む人的ネットワーク

八九年夏に留学から帰国してまもなく、幸運にも、日本医科大学の助手の職を得たり、ナポリ大学留学中に研究を進めてまとめてい